「授業改善のための学生アンケート」2026 年度前期 顕彰授業における工夫

2026 年度前期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。

【参考】顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 6 項目です。

Q3　教材や配布資料の内容や分量は適切だった。
Q5　教員の説明はわかりやすかった。
Q6　教員は学生からの質問、相談、提出物に対して適切に対応していた。
Q7　この授業の内容に興味を持つことができた。
Q8　この授業を履修したことに満足している。
Q9　この授業を他の人に勧めたい。

＜部門Ａ（履修者 6～14 名）＞

「国語国文学特講（表現学）Ⅰ」　三浦　則子先生（文学部国語国文学科非常勤講師）
2026 水 2 前期　国語国文学科専門科目

「表現学」の授業では、総合的な日本語表現力の向上を目指しています。講義形式の授業のほかに、学生の皆さんがアクティブに話し合って作品を創作したり、スピーチを行ったりする授業があり、特に「話す」「書く」能力の向上に重点を置いています。

「話す」では、与えられたテーマについて３分間程度のスピーチを行い、話す力・説明する力の向上を目指しています。聞く側も必ず質問・コメントをするようにして、一方的に話すだけにならないよう配慮しています。

「書く」では、さまざまな形式の文章を書いてもらいますが、近年、特に力を入れているのが「神無月」（国語国文学会発行の冊子）に投稿する文章などをグループで創作することです。

まず、「神無月」のバックナンバーを読み、これまでに先輩たちがどのような作品を書いてきたのかを調べるところから始め、自分が表現したいジャンルを決めてもらいます。それは短歌や小説の創作かもしれませんし、テーマに沿った作文や、イラスト等を多用した作品かもしれません。そして、皆さんの希望によって数名のグループを作り、一つの作品を創作していきます。

グループができる頃までに、学生たちが自由に発言できる雰囲気を作るよう心がけています。学生アンケートに「学生同士の交流やグループ活動が多く、色んな人と関わることができ面白かった」といったコメントがありましたが、一つの目標に向かって協力し合う関係を作れれば、グループ活動は自ずと面白いものになっていくのだと思います。

グループでの活動が始まれば、こちらが何も言わなくても、学生同士で話し合い、創作が進んでいきます。たとえば、「５名のグループで、小説を書こう」とした場合、どのような設定にするのか、登場人物は何人か、どのような人物か、年齢は、性別は、場所は、季節は、

などなど。皆で意見を出し合い、暴走して笑いが起きたり、修正して、また一から話し合ったり、何よりも学生の皆さんが精力的に活動しています。そのように盛り上がって話が動いている時は、こちらはそっと見守り、行き詰まった様子が窺える時には、一緒に考えて意見を引き出すようにしています。

一方で、連句のように、前の人の文章に続きを書いて繋げる「リレー作文」では、LINEで授業外でも活動を続けていて、対面授業の際には現状を確認し合うだけということもあります。

そうした、学生が主体となるグループ活動を行うことで、互いに刺激し合い、創作意欲の高まりにつながったように見受けられました。完成された作品を読むと、彼女たちがグループ作品に惜しみなく時間を注いだことに心を動かされます。この授業が顕彰されるに至りましたが、それは才能に溢れた履修学生の皆さんが努力を重ねた結果であって、私はそれを形にする場を提供したにすぎないと感じております。

本授業を担当させていただいてから、早20年余りの歳月が経ちました。「表現学」でも授業内容に関してマイナーチェンジを繰り返してまいりましたが、今の学生のニーズについて、国語国文学科研究室の助手さんからお話を伺う機会を得られたことも、大きな助けになりました。また、これまでに「表現学」を履修された皆さまにも、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

＜部門Ｂ（履修者15～29名）＞

「領域言葉」　土橋　久美子先生（人間総合学部初等教育学科准教授）

2026 月4 前期　初等教育学科専門科目

「領域言葉」について

幼児教育・保育を学ぶ学生が履修する授業です。幼児教育には、保育者が子どもたちの育ちを総合的で見る視点として5つの領域があり、「領域言葉」はその一つとなります。絵本や紙芝居、パネルシアター、ペープサートなどの児童文化財の特徴や活用方法を学び、演習（保育実践）を通して、保育者の役割などについての理解にもつなげています。保育の中で子どもたちと楽しむ教材を自ら作り出していく、学生の主体性が求められる授業となっています。

授業の内容について（Ｑ５、Ｑ６、Ｑ７）

授業の取り組み態度や言語表現教材の課題提出期限など、他の科目よりも少し?!厳しめな授業だと思います。学生一人ひとりがその厳しさ、難しさ、そして大変さに向き合い、演習を通じて達成感や満足感を得ることが出来るよう、学生との対話を常に持つことを意識していました。紙芝居の演習では、良かったところや課題点など学生同士お互いに意見を交

換し合いました。ペープサートや牛乳パックの人形制作では、仲間と一緒に取り組むことで多くの刺激が生まれ、制作意欲につながったと感じています。この授業の集大成といえる「なんでも BOX 実践発表」では、一人ひとり自分の名前を紹介するパネルシアター「なんでも BOX」を作成し、グループ発表も行いました。演習（実践発表）を通して、教育・保育実習に向けてのイメージを持つことができたと思います。

教材について（Q３）

教科書は授業計画に沿ったものを使用し、教科書内に書き込みをしながら独自のテキストとなるように提案しています。制作で使用する素材（材料）に関しては、各自早めに準備できるよう授業初回で提示し、学生自身、見通しを持って授業に取り組むことができるようにしています。また、授業内で使用したパワーポイントなどは、manaba course のコースコンテンツに掲示し、各自で復習できるようにしました。

おわりに（Q８、Q９）

この授業は、制作を経て実践を進め、各自の課題と向き合う授業だと思っています。学生自身、自分が作ったもので発表をすることは、とても緊張します。しかし、やり遂げたあとには「作って良かった」「発表できて良かった」「友達から褒められて嬉しかった」という感想が聞かれ、達成感や満足感、充実感を味わっていた様子がありました。これからも、学生との対話を大切に、「学生の学びにつながるものとは何か」という問いを常に意識しながら、授業内容を検討し展開していきたいと思います。

学生の授業への取り組み、主体性がこのような顕彰表彰につながり、心より感謝いたします。

＜部門Ｃ（履修者 30 名以上）＞

「児童文化入門Ｂ」　森下　みさ子先生（人間総合学部児童文化学科教授）

2026 火 3 前期　児童文化学科専門科目

全集中！「遊」の呼吸

１年生の必修科目で、入学したての学生がみな履修します。目指すは「児童文化って面白い！」「学ぶって、こんなに楽しい！」「え、もう 90 分たっちゃったの！？」「次の授業が待ち遠しい」・・・と思われるような「遊ぶがごとく面白い」授業です。「遊びの中に文化がある」が児童文化の基盤なので、先生方からアイデアをいただいたり、学生に訊いたりして「遊の技」を磨いています。が、まだまだ、遊ぶがごとき学びの境地には達していません。それでも少し、いくつかの極意を身に着けましたのでお伝えしたいと思います。

【「手」使いの型】

昼食後の授業ということもあって、おそいくる睡魔に勝ってもらうためにも、手を使う機会を設けています。穴あきレジュメを配布し、パワポや私の解説をもとに、自らの手で穴を埋めてもらいます。集中力が増すと同時に、手を使って書くことで頭や心に刻まれるのではないかと思います。また、おまけ、おもちゃ、絵本などは、配ったり回したりして、できるだけ実物に触れてもらうことで、手を介したモノとの出会いを実感から学んでもらうようにしています。

【「笑い」の型】

真剣に考えるテーマもありますが、面白くて「笑ってしまう」ことで気づいたり、共感できたり、心の奥に届いて刻まれたりすることもあるので、授業の中で１回は「笑う」機会を作るようにしています。特に私が拾ってきたエピソード「子どもあるある」は、笑いとともに子どもの世界にダイブする楽しさと深さがあると思います。・・・実は、「子ども」探索をしてネタを用意する私自身が児童文化の楽しさを再発見しています。

【交わりの型】

インタビューやレスポン（マナバ）を使って、受講者の体験や考えや思いが交わる機会を設けています。一方的な講義で飽きてしまわないための工夫でもありますが、受講者の反応が命、ドンピシャリの答えだけでなく、思わぬ回答や、新たな問いが投げかけられることもあり、ライブの面白さを共有しています。